昭和六年度卒業論文題目

哲學專攻

フィヒテ哲學に於ける純粋事行の問題　茅根一誠
カントの先驗的統覺　古澤龍彌
ディルタイに於ける科學批判の問題　樋元和一
哲學的思惟に就て　堀伸夫
ディルタイの世界觀學　石田仁
カントに於ける「命法」　角野達堂
アリストテレスの時間論　熊野達六郎
先驗的演繹論の問題　三登義雄
思惟の豫想と認識の構造　大河平樂雄
意志自由論の方向と輪廓　小野隆祥
アナムネシスとエロスと　酒見俊夫
浪漫的人間より社會的人間への轉向　杉崎三八郎
スピノーザのアントロポロギー　筌實
ヘーゲルの Panlogismus　玉井茂
有、無、成　德永爲雄

西洋哲學史專攻

シェリングの史觀に於ける個體の自由　勝田守一
ヘーゲルの精神現象學に就いて　菊地律郎
—その序言を中心として—
プラトーンのメテクシス　松本厚
カントの Idee に就いて　松山凌三郎
シェリング「先驗觀念論體系」について　中田良藏
輝童子篇模索　小川政恭
カントに於ける超越論的自由　山本新之助

印度哲學史專攻

印度解脫思想の一考察　北村卽源
本願思想の起源及び發展の一考察　末森尙治

支那哲學史專攻

戴震に於ける理義　井上正定
「莊子」內篇の思想に對する哲學的一考察　笠原仲二
「詩」に見える支那古代社會に就いて　桂太郎
墨子兼愛說についての管見　尾崎一政
公羊傳舊疏考證　重澤俊郎
孔子に就いて　辻林富敏

心理學專攻

ピアーゼの「子供の世界觀」に就いて　藤澤成太
童話及童話想像　福江篤彦
性格の構造並にその研究方法の一試案　原眞一
—特に「でしやばり」に就いて—
所謂「擬態語」に就て　木森重樹

價値意識、特に經濟價値意識の心理學的解明　北村昇次郎
光のリズムに就いての一研究　中山覺
精神作業の一研究（作業條件を主として）　若岡隆夫
感情と嗜好に就て　山名遠

倫理學專攻

フィヒテの自我と非我　蓮實義倫
カント實踐理性批判分析論における理性と感性に就いて　金澤初太郎
ギヨー倫理の一考察　河野通文
カント哲學に於ける「意志の自由」　西村精一
コーヘンの自己意識に就いて　内田文雄

教育學教授法專攻

ペスタロッチー教育思想の基礎　鮫坂二夫
教育學の科學的性格（E. Sternを中心に）　有田健一
文化科學としての教育學と社會學との關係　夏文運
教育の根底としての人間性の理解（道德と宗教の關係に就いて）　三谷久男
日本教育史上に於ける寺院俗人教育の本質　森澤四郎
ナトルプ・社會的教育學の研究　永山信
ペスタロッチイに於ける人生及び人間の理解　西元宗助
「ウィルヘルム・マイスターの遍歷時代」に於けるゲーテの教育思想　大童信三
陶冶性の概念　佐藤金美

美學美術史專攻

江戸派の銅版畫に就いて　新井英夫
「文學の眼」と「映畫の眼」　平田陽一郎
様式の藝術史的意味　久富貢
Sandro di Botticello　堀瀨尙夫
美的別斷力批判の課題　井島勉
映畫藝術に於けるリズムとテムポについて　中村秋一
映畫史の根本問題　杉山末
藝術の社會學的研究について　德富治雄
パブロ・ピカソ論　富永次郎
印度彫刻に於ける象徵の問題　上野照夫
近代文藝に於ける音韻の研究　鍋島謙太郎
Paul Cézanne について　安原喜弘
ガッツの音樂美學に就いて　吉田辰雄
カントの數學的崇高と力學的崇高とに就いて　山野敏三

宗教學專攻

神々のたそがれ（フォイエルバッハに就いて）　坂野利郎
宗教を語る立場に就いて　藤井碩舍
アリストテレースの神觀　深田壽
エックハルトの「たましひ」に於ける神經驗に就いて　宮川儀逸
シュライエルマッヘルの宗教論　高橋文西郎

パスカルのパンセに就いて　矢追富夫
パスカルに就て　矢島嘉久

社會學專攻

Eyeyer の現實科學としての社會學論　野一色利衛
社會的行動論　山添喜信

佛教學專攻

世親の唯識說に就いて　加藤一誠
原始佛教の優婆塞優婆夷　杉本正美
龍樹の淨土教に就いて　竹田玄智
色受想行識無常苦無我につきて　上野順瑛
原始佛教に於ける戒律の一考察　鷲岳解雄

新刊紹介

道家論辨牟子理惑論解說　神尾弐春著

牟子の內容は佛教を中心とした佛儒道三教の調和論である。但し儒の上に道をおき、道の上に佛を置いてある。著者は不明であり、著作の時代も不明であるが、宋明帝の泰始年間陸澄が勅を奉じて撰んだ法論に始めて見えてゐるから、それ以前のものたるは明らかである。隋書經籍志に「牟子二卷後漢太尉牟融撰」とあるので、久しく作者を牟融と信じられてゐたが、自序の內容と牟融の傳記が一致しないので牟融撰といふ說は破れる。しかし時代だけを生かして、この書を漢又は魏ごろの無名氏の著と見る說が出てゐるが、晉以後の僞作と考定する新說もある。

また昔は隋書に載する所によつて知られるが如く單行本があつた筈であり、その名は我が藤原佐世の見在書目にも見えてゐるのであるが、いつしか亡んだので、學者は梁僧佑の撰んだ弘明集の卷頭に收錄してあるものを見るしか出來なかつた。

然るに朝鮮で牟子理惑論を筆削した「道家論辯牟子理惑論」と稱する古刊本が存在してゐた。神尾氏が今回之を發見し、原本通りの形式に寫眞銅版で飜刻されかつ、色々の文獻を涉獵して筆削本の解說を著された。筆削本と弘明集中の牟子とを比較すると、筆削本は弘明集以外の牟子から筆削したことが推定されるので、これによつて單行本牟子の存在したことも確定され、又弘明集本が單行本牟子そのまゝを載せたものでないことが明かとなる。更に筆削本には宋の何承天や慧琳等の說を引いてゐるが(これらの引用は弘明集本にない)、これによつて牟子の著作年代を宋と見る說に有力な證明を與へることになる。又この書が朝鮮で筆削されたと推定できるので、朝鮮の佛教史や文化史の研究にも有力な材料となるであらう。神尾氏がこの書を飜刻されたのは、種々の點で學界に少なからざる寄與をなすであらう。(高橋)(京城光化門通り神尾弐春氏發行、非賣品)